

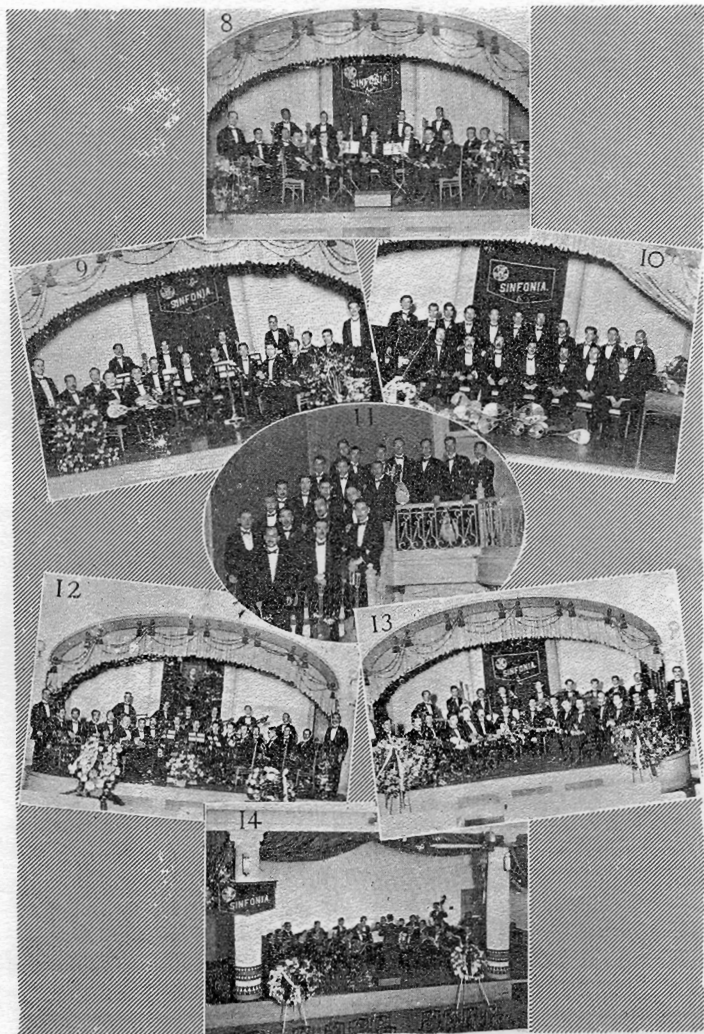
附 録

オルケストラ・シンフォニカ・タケ井十年回顧

本オーケストラ演奏會紀念寫眞



第一回乃至第七回演奏會



第八回乃至第十四回演奏會

私達がオルケストラを創立いたしましたから早くも十年の歳月が流れました。短い様でも一昔、其間には種々な障害や變化もありましたが幸ひにして私達の努力は相當に報ゐられつゝあります。之一に斯界の諸兄が私達の運動を理解して下さる賜と常に感謝して居る次第であります。

昨年の震火災は私達のオルケストラに言語で云ひ盡せぬ大打撃を與へました。私達自身ですら再起を危ぶむ程の大損害を一瞬時に加へられました。

然し幸にも私達は復興に努力する勇氣を失ひませんでした。そして思ひの外迅速に復舊の仕事は進捗しました。今や新らしい「オルケストラ・シンフォニカ・タケキ」の會名の下に諸種の運動を實行して居ります事は諸兄も御承知の通りで御座います。

此機に於て私達は此誌上に過去十年を振り返つて見たいと思ひます。讀者諸兄にとつては御迷惑の事と存じますが御許容下さる様御願ひいたします。

大正四年秋十月頃、本郷の武井氏邸に武井氏兄弟と田中常彦氏とで時折合奏を行つて居たのが實に本オルケストラ創立の基で其十二月末佐藤信忠氏が之に加はり第一マンドリンが田中氏と武井(弟)氏、第二マンドリンが佐藤氏、ギターが武井氏、ピアノが武井氏夫人と云ふ配置で稍組織的に合奏を行ひ得る様に成つてからオルケストラ設立の曙光を認める様に成りました。

大正五年正月勿々私達は此合奏團に初めて「シンフォニア、マンドリニ、オルケストラ」の名を冠し標章を作り尙メンバー徽章をも製作して各自がもつ事にしました。だが當時の人数及其演奏曲等よりすれば「オルケストラ」の名は随分鳥辭がましい次第でありました。然し二月に入つて矢野幸一氏、四月に市川清、濱口樟一郎兩氏、五月に田中伸氏を迎へ同時に其時分迄樂譜に苦しんで居た私達の許へかねて注文して置いた合奏曲が多数伊、米兩國から到着し、且樂器もマンドラ、マンドロンチエロ、ハープギター等が手に入つたのでオルケストラの基礎は漸く強固を加へる様に成つたのです。(矢野幸一氏はマンドラのパートを擔當して居たのですが間もなく郷里に用事が起つたので遂に日淺くしてオルケストラを退きました。)

之より曩き武井氏は斯界の爲に小雜誌を刊行する事を企圖して居ましたが漸く機熟したので遂に四月より小冊子を發行する準備に着手しました。當時の私達、それは「オルケストラ」と云ふ名をもつさへ鳥辭がましい私達が雜誌を出す等と云ふ事は今にして考へれば随分大膽な話ですが其時は何よりも新らしい運動を起したい希望が大きく、すべての行動は實際極端な熱心さと眞面目さの下に行れたものです。一例を挙げれば愈々雜誌を出すと云ふ決定的の相談は三月十七日折柄徹恙で臥床中の武井氏の枕許で田中氏との間に行はれた様な有様でした。斯くして小さい乍らも素人としての相當苦心の末四月七日雜誌は東京國文社の印刷の下に出來し同月十日附を以て發行されましたが元より此時は全然發賣せず先輩、知人及其他の希望者に贈呈したものです。此「マンドリンとギター」第一號は八頁全部六號活字組の貧弱な小

冊子ですが私達に取つては實際印象深いなつかしいもので同時に今日ではオルケストラにも僅か二部しか残つて居ない貴重なものに成つて居ます。此誌上に「シンフォニア、マンドリン、オルケストラに就いて」と題して私達自身の紹介なり宣言なりを載せました。當時を思ひ起すすがにもと次に略記して見ませう。

◎私達が此アマチュアオーケストラを作つたのは別に大した目的や抱負があつての事ではなく只マンドリンオーケストラを真摯に研究しやうと云ふアマチュアの同好者が集つただけである事。

◎オーケストラはマンドリンを中心とし、マンドラ、マンドロンチエロ、パンジョ、ギター、ハーブギターキタローネ、ピアノを以て編成する事。

◎毎週一回合奏を行ひ此研究の結果を眞面目に批評して戴く爲に時々試演會を催し同好者の來聽を乞ふ事。

◎演奏に關する指揮は田中(常)氏、其他の一切は武井氏が掌る事。

◎假令如何に小規模であらうとも將來價值ある演奏をする事が出来れば私達は満足なる事。

當時米國のマンドリンオーケストラに倣つてオルケストラにパンジョを加へる心算がありました。キタローネは此時既に注文が出て居て私達はおそくも其秋には此樂器を手にする事が出来る考へであつたのです。此キタローネが遂に新嘉坡で船火事の爲に焼失し第二回注文品が大正九年に積出されながら、又しても奇蹟的に途中で紛失し漸く第三回に到着すると云ふ手數がかつたのは全く不運でした。

尙此第一號には全然音樂とはなれた對話などが掲載されて居るのも面白い事です。そして樂譜は勿論添へてありませんでした。

雑誌は曩きにも記した通り當時全然發賣せず希望者に頒つて居たのですが不思議に全国各地から一人二人宛申込があつて毎月約百部宛頒布されて行きました。第二號からは紙質も改良し頁數も十頁としそれに廣告なども入れて第一號から見れば餘

程整つたものに成つて來ました。今米國へ行つて居る堀内敬三氏が歌劇の中の有名な歌詞の譯を寄稿して呉られたのも當時は大に力に成つたものでした。そして發行は毎月十日です。

斯う云ふ間にも合奏は毎週金曜日の午後七時からかゝらず開始し而も實際眞摯熱心な努力を續けたものでした。

合奏の重なるにつれ私達はかねて計畫のあつた試演會を愈々開いて見る事に決心し少し無理とは思ひましたが六月四日午後七時から武井氏邸内の西洋室、即ち平生の合奏場で開催の事に運びました。

曲目は合奏でスタルクの「劍と槍」(行進曲)、ホールの「風の結婚」(圓舞曲)、ヴェルグイルラの西班牙風舞曲二つ、即ち「ラ・バルメラ(ハバナラ)」と「ラ・ラニカ(ホータ)」、ケラ・ベラのオヴァテユア・ルストシユビール、バートレットの「夢」、グロ―エンワルドの「ツアルダス」、グノーの歌劇「ファウスト」抜萃曲等で此外には田中

常彦氏のマンドリン獨奏でムニエルの作品第三百二十四「マヅルカ」及びラ・スカラの「タランテルラ」、武井氏のギター獨奏でウオロールの寫景幻想曲、それに田中氏のパンジョ獨奏と田中、武井、佐藤三氏のギター三部合奏がありました。此三部合奏はドニツエツタイの「聯隊の娘」の抜萃曲で田中氏がアレンジしたのですが最初にはマヌエル・イー・フェレールの複雑なギター曲を基礎として編曲に着手したところ餘りに厄介なものに成つたので演奏會一週間前に全然アレーンデしなほすと云ふわけで三人とも練習不足で血眼になり而も失敗の結果を見たのでした。演奏者は第一マンドリンが田中氏、武井(弟)氏、田中(仲氏)第二マンドリンが佐藤氏、濱口氏、マンドラが市川氏、ギターが武井氏、ピアノが武井氏夫人で指揮は田中常彦氏が演奏しながら執つて居たのです。來聽者は最大限度の二十五人計でしたが何分にも狭いので演奏は非常な困難を忍ばなければ成りませんでした。然し第一回の試演會が濟んで私達は漸くオルケストラの存在を自ら明に認める様に成りました。

夏は七月末から八月にかけて合奏を休みましたが此間にも注文の合奏譜は陸續として到着し、譜庫は漸くに充實して來ました上、田中氏はオルケストラの爲に優れた曲のアレンジに努力しつゝありました。斯くして九月から新に小笠原牧四郎氏と關根文三氏を迎へ前者はマンドラへ後者はギターへそれぞれ新しい力を加へる事に成りました。雑誌の方は幸ひにも其後引續き刊行し頒布希望者も漸次其數を増しましたが此無代頒布には一面弊害の伴ふ事でも知りましたので將來については種々研究を行ふ事になり其結果後に發賣と云ふ事實が現れる様に成つたのです。慶應マンドリン倶樂部の演奏について誌上に批評を載せ、それが基て同倶樂部とオルケストラとの間に書面での一論戦があつたのも思へば面白い出來事でした。

十月には岩倉具顯氏(第一マンドラ)小西誠一氏(第二マンドラ)を更に迎へ入れて漸次に各パートが纏り十一月十八日第二回試演會を開催する運びに成りました。此第二回試演會には第一回到大きい椅子を置いて狭い室を餘計狭くした失敗に

鑑み成るべく場席をとらない小型の椅子ばかりをならべ其上演奏に先立つて來聴の方々に成るべく後方へ詰めて下さる様に御頼みしたので私達の方は前回より遙に樂に演奏が出來ました。そして男聲獨唱も入れる希望をかねてもつて居たのですが幸に岸田辰彌氏が歌つて呉れる事に成りました。(曲目中特に「獨奏」「二部合奏」等斷りたる以外は全部オーケストラです。)

序樂「美しいガラチア」

スツベ

ギター二部合奏、a、アリオオーゾ

ジュリアーニ

b、アレグレット

モツアルト

男聲獨唱、ロックド・イン・ゼ・クレドル・オヴ・ゼ・デーパー

ナイト

挽歌

マスネー

歌劇「サムソンとダリラ」中の「君が御聲に我心は開く」

サンサーン

ギター獨奏、a、小夜曲

サルコリ

b、ガロッツ

カルカツシ

名歌劇綜合曲

ロバート

マンドリン獨奏「愛の歌」

ムニエル

歌劇「リゴレット」拔萃曲

ヴェルディ

演奏者は第一マンドリンが田中(常)、田中(伸)、小笠原、岩倉四氏、第二マンドリンが佐藤、小西、武井(弟)三氏、マンドラが市川氏、ギターが武井、關根兩氏、ピアノが武井氏夫人で指揮は例により田中(常)氏が執りました。そしてマンドラ不足の補ひとして、「美しきガラテア」と「リゴレット」とには小笠原氏がマンドラパートへ廻りましたが特に前者に於てはマンドラとマンドリンとの兩刀遣ひをやる様な騒ぎがありました。獨奏者は前回同様田中氏と武井氏でした。岸田氏は演奏會前風邪をひいて寝て居たのに拘らず當夜は兎も角も歌つて呉れました。そして此時の心持を氏自身で書いて翌年正月の雜誌に寄せたのは可成興味あるものです。斯うして

思出多き私達の運動の第一年は暮れて行きました。

大正六年に入つてからもオルケストラは前年と同じ運動を続けました。合奏は相變らず毎週水曜の午後七時からでよく雨が降るので水曜の爲だらうなどと云つて居たものです。(合奏は第一回試演會後から水曜日に成つた様に記憶します。そして今日に至るまで變りません)それから此頃「ムニエルの夕」を開く計畫がありました。申すまでもなくマンドリン獨奏、二部合奏、ギター獨奏、オルケストラ迄全部ムニエル作品で埋めた演奏會を開かうと云ふのです。而も之が漸くムニエルの死去十年祭を期として大正十一年に開かれる様に成つたのは滑稽です。

雑誌の無代頒布に就いて種々弊害を感じて居た私達は此四月號から、即ち發刊滿一年の雑誌からいよいよ公に發賣する事とし、それに就いて豫て懸案に成つて居た樂譜添付を實行する事にしました。そして發賣所は山野樂器店へ依頼し價格は一部十錢、發行日は毎月一日ときめたのは三月初めの事でした。樂譜は先づ手初として

カルロ・リツシーニの「Dansez-vous」と云ふのを入れましたが印刷所國文社でも最初の事で餘り鮮明には行きませんでした。表紙は今迄と圖案を少し變へギター六絃、マンドリンの復線四絃を現はしました。兎も角も此發賣は私達の雜誌に一紀劃を與へたもので此時以前のものは全く内輪だけの事で此發賣第一號が或意味に於いて本誌の第一號であるとも云へるのです。

演奏の方面では第三回試演會を愈々五月十二日に開きました。メンバーは前回と變りませんがオルケストラに初めてマンドロンチエロを加へる事に成り小笠原氏が其第一のマンドロンチエリストと成りました。曲目は次の通りです。

歌劇「ツアンバ」

ヘロール

四部合奏、a、ゴンドラ・ヴェネツィアーナ(メンデルスゾーン)

ムニエル編

b、ヴェネツィアの謝肉祭

ムニエル編

スコットランド風子守歌

ニッツ

我愛するものへ(圓舞曲)

シユット

ラ・ツアリース(露西亞風マヅルカ)

ガンヌ

ギター獨奏、a、露臺の下に

グリーンランド

b、夢想曲

ヘーデン

歌劇「ラ・トスカ」抜萃曲

プッチーニ

マンドリン獨奏、イ調の第一コンチエルト

ラ・スカラ

歌劇「イル・トロバトーレ」抜萃曲

ヴェルディ

此時は來聽の方々(それは矢張二十四五人でありましたが)から合奏曲中最後の「イル・トロバトーレ」が一番喝采を拍しましたが事實は「ラ・トスカ」が最も優れて居たのでした。「ツァムバ」の序樂は手に入り過ぎる程樂に出來たので安心して居た結果大失敗に終つたので私達の間では「ツァムバ」と云へば「失敗」の略語になつて居

ます。獨奏者は孰れも前回と變りませんでした。それから「ラ・ツァリーヌ」にタムボリンとトライアングルを入れるので小笠原氏が擔當しましたが餘り懸命に成り過ぎて随分大きな音を出しました。もう一つ此時の新らしい企てとして演奏時には電燈を消滅し只演奏者の部分だけへ青色光を天井から輝して見たのですが、研究不充分であまり成功しませんでした。然し設備さへよくすれば此種の企ては決して悪くないと信じて居ます。

六月六日夜オルケストラの晩餐會を上野の精養軒で開きました。之はメンバー相互の親睦を計るのとオルケストラの今後の方針について意見の交換をする爲でした。

雑誌の方は七月號から頁數を二頁増して本文十二頁とし徐々としてではありましたが發展の實を擧げて行きました。そして此月から二見文學士が毎月稿を寄せられましたのは私達の感謝する所です。

大正六年八九兩月誌上でオルケストラはメンバー募集を公表しました。之は勿論オルケストラ最初の企てで其結果については可成に深い好奇と期待の念をもつたものでした。申込期限は九月十日です。

元來私達のオルケストラは學校の音樂俱樂部若しくは教授者が門弟等を集めて組織した團體とは全く趣を異にして居てメンバー全體相互間に眞に理解がなければ成らないのです。其點から見てもメンバーの一般募集と云ふ事が好結果を齎すや否やは随分問題に成りました。

申込者は六七名ありました。其方々には武井氏、田中(常)氏が時日を定めて直接御面會し、オルケストラの内容も御話すると同時に其方々の御意見をも聴取し且短い曲の一節を演奏して戴いたりしたのです。

斯くして自他共にすべての點に於てオルケストラメンバーとしての了解を得て入る事に成つたのは結局只一人、それが渡邊浩氏(今日の松崎浩氏)です。尤も此外に

應募されたのではなく會員の紹介の下に高橋文雄氏が入られましたから都合二人の新メンバーが九月から加はつた譯です。

扮秋の試演會は愈々時期も切迫しましたが何分にも從來の演奏場では到底満足な演奏會を開く事が出来ないので相談の結果初めて丸の内の生命保險協會のホールで十一月十七日夜開催する事に成りました。何分にも他のホールを使用するのは初めてであり音響の工合もどうかと可成り心配しました。曲目は次に掲げます。

歌劇「セミラーデ」序樂

ロツシーニ

四部合奏、二調の四部合奏曲(作品百二十八)

ムニエル

高音獨唱「終詞」

クーラ

歌劇「ラ・ジヨコンダ」中の「時の踊」

ボンキエルリ

喜歌劇「シエルバン」中のオーバード

マスネー

エスバナ圓舞曲

ワルドトイフェル

ギター獨奏、a、樂しき思ひ出

アルナオ

b、慰樂曲(作品第二十三の二)

ソル

高音獨唱、a、黒い薔薇

シベリウス

b、日の光のさす時

メリカント

マンドリン獨奏、第二の前奏曲

カラチエ

歌劇「ラ・ボヘム」綜合曲

ブツチーニ

此試演會に渡邊シイリ夫人を高音獨唱に煩して私達の希望する儘に北歐芬蘭の作家の曲のみを唄つて戴きました。南歐の氣分と北歐の氣分とを組合せたのは随分奇抜です。

田中氏のマンドリン獨奏は都合上ムニエルのヴァルツエル・コンチエルトに変更するの止むなきに至りました、と云ふ譯は樂器のフレットが不足で如何にしても前掲の曲を奏する事が出来なくなつたからです。「エスバナ圓舞曲」には第三マンドリ

ンのパートを設けた上カスターネットとタムポリンとトライアングルとを加へました。「時の踊」は田中(常)氏の手に編曲されたもので「シエルパンのオーバード」の感傷的な旋律と相俟つて注意を惹きました。來聴者は最初百二十人位の豫定が二百人を超えてしまひましたがしかし演奏者にも亦來聴の方々にも前三回の窮屈な演奏會に比して遙に氣持よいものでありました。そして音響の工合も思つたよりよく電燈の調子もさして悪くありませんでした。只一演奏毎に幕を下したのとステージ全體に幕を張つたのは不要の勞力に終つた様に思はれます。

演奏者は前回のメンバーに渡邊氏(第二マンドリン)、イーストレーキ氏(マンドラ)、高橋氏(マンドロンチエロ)の三人が加はつただけですが演奏會間際に小西氏が喪に服して出られなくなつたので急に室原隆興氏が加はる事になりました。イーストレーキ氏は云はゞ客員のような状態の下に此試演會だけに加はつたのでした。

マンドリン及ギターの獨奏者は前回通りで四部合奏は田中(常)、小笠原、田中(伸)、武井四氏に據りました。ムニエルのオリヂナルな四部曲が演奏せられたのは日本に於て之が最初です。

改革の試演會は大體に於て成功でした。第一にステージと來聴者との間に相當距りのある事がプレクトラム演奏會に於いて非常に必要である事を痛切に感じました。

演奏會後十二月室原氏を正式にメンバーとして迎へる事に成り同時に岩倉氏は一聯隊へ入營しました。そして印象深いオルケストラの第二年は暮れました。

大正七年正月二日から合奏開始。一月二十日には日本橋の末廣で新年宴會を開きました。高橋氏だけは病氣で缺席しましたが外は全部集り愉快な一夕を過しました。

一月には佐藤氏がギターのパートへ廻つた事と雑誌の編輯人の名義を武井氏から弟氏へ移した事の外格別變りはありません。雑誌の方は其後不相變毎月刊行し一月

には初めてギター獨奏曲としてオルコット夫人のフランチェスカをマンドリン曲と併せて添付しました。

小笠原氏は三月に外語馬來語科をめたく卒業され横濱正金銀行の本店へ勤務の豫定が神戸に變つたので遂に此時以後暫く同氏はオルケストラに加はる事が出来なくなりしました。オルケストラは四月四日夜心ばかりの送別會を開いて暫く別袂を惜しみました。之より前、田中(常)氏は實業方面を全く辭して専ら丹青の道に没頭する様に成りましたが勸業銀行に勤務中の小西誠一氏が同行を辭して再び母校慶應の文科に入學したのは氏の文學美術愛好熱の如何に旺盛なるかを語つて居る事實です。

オルケストラに取つて尙一大變動とも云ふ可きは四月瀬戸口藤吉氏を指揮者として迎へる様に成つた事です。同氏はかねてオルケストラに同情と好意をもたれ且武井氏とは從來交誼厚かつたので殆ど自然の結果としてオルケストラの指揮者たる事です。

に成つたのです。前年海軍軍樂隊が武井氏所持のレギュラーオーケストラ曲譜の十數種(それは日本では皆初演のものですが)を順次公演した時の樂長が即ち瀬戸口氏です。

同氏を指揮者として得た結果合奏は甚だ秩序が立つて來ました。そして菅原明朗、林田勝一の兩氏が新にメンバーとして加はりました。

第五回演奏會は、六月八日、例の保險協會で開く事に成りました。演奏者は第一マンドリンが田中(常)、田中(伸)、高橋、山根四氏第二マンドリンが小西、武井(弟)、渡邊、林田、平井五氏、マンドラが市川、室原、田中(誠一)三氏、マンドロンチエロが菅原、松田兩氏、ギターが佐藤、濱口兩氏、ハーブギターが武井氏、ピアノが武井氏夫人で此内山根、平井、田中(誠一)、松田、濱口の五氏は慶應マンドリン俱樂部から來り加はられたのです。之は同俱樂部とオルケストラとの連鎖ともなり且つ相互研究の爲めにも好良の結果を見るだらうとの豫想から行はれた事でした。

演奏曲目は次の通りで幻想曲「黎明」、小交響樂「マンドリンの群」など眞に獨奏的なマンドリン曲がプログラムを埋めました。此演奏會曲目は本邦に於けるマンドリンオーケストラ史上に新紀元を劃したものでありました。此時を初めとしてオルケストラは毎回オリヂナルな曲目を編成したのです。四部合奏曲は前回につゞいてムニエルの四部合奏曲を上演したのです。

一、幻想曲「黎明」

ファンタウツツイ

二、マンドリン二部合奏、a、ブレルデイオとカブタイナ ドニツエツタイ

b、アツレグロ・ヅイヴァチエ ロツシーニ

三、ギター獨奏、a、アルナルド

コレツツオラ

b、西班牙風圓舞曲

カルカツシ

四、小交響樂「マンドリンの群」

ブラツコ

五、船唄(作品第三十七)

チャイコフスキー

無言歌(作品第二)

チャイコフスキー

六、四部合奏、「ト調の四部合奏曲」(作品七十六)

ムニエル

七、天使の夢

ルビンスタイン

八、マンドリン獨奏「ホロネーゼ」

カラーチエ

九、歌劇「ラ・トラヴィアタ」拔萃曲

ヴェルディ

指揮者は申す迄もなく瀬戸口氏で、獨奏者は前回通り、四部合奏は田中(常)、渡邊、室原、武井の四氏に委ねられました。「天使の夢」にはダルシトーンと云ふ樂器を使用しました。カラーチエの曲が演奏されるのは日本では今回が初めてでムニエルに比して遙かに革新的なカラーチエの曲を紹介出来たのは何より嬉しい事でした。此演奏會に於て開會を正七時に決行する覺悟のところ或事件の爲めに十分程おくれてしまひました。それは滑稽極まるもので田中(常)氏が間際に成つて便所に飛び込んで中々長くかゝつたからなのです。

此演奏會に於いて特に注意すべきは從來試演會と稱したのを今回から知友の勧めによつて「演奏會」とした事です。

演奏會終了後慶應マンドリン倶楽部の山根氏等五人の方々はオルケストラから退かれました。それは要するに二つの團體に籍を置く事が矢張り面白い結果を生じないからに外なりません。それから此秋に關西の方へ演奏旅行をする企圖がありました。種々具體的に調査を行ひましたが都合上それは中止に成りました。

七月初旬から月末迄一週二度合計八回、オルケストラ内にギター練習を行ふ事を決し武井氏を教師として田中(伸)、小西、渡邊、高橋、林田の五氏が熱心に練習を行ひました。孰れもギターは前から手にして居る人々ですが特に規則立つた練習を此閑暇な時に行はふと云ふのが主意で熱いのを冒して可成り猛烈に練習しました。もう一つ此頃の出来事で記憶しなければ成らぬのは會務の處理上幹事二名を置く様に成つた事で田中(伸)、小西兩氏が先づ以て其任に當る事と成りました。

佐藤氏はめでたく明治大學を卒へたので急に京都の或織物會社へ勤務する事となり七月下旬に赴任しました。同氏はオルケストラ創立當時のメンバーで此人を失ふ事はオルケストラにとつて誠に悲しい氣持がされました。

さてかねて雑誌の六號組を五號組にする事はオルケストラの内部にも亦一般愛讀者側からも希望されて居ましたが、私達も愈々それを實行する事に定め十月號だけを休刊して十一月から遂に五號組三十頁の雑誌に改める事に成りました。同時に編輯者を高橋氏に、印刷所を同勞舎に、發賣所を共益商社に、定價を十五錢に変更する事にしました。之は私達の雑誌としては眞に一大改革でありました。(序に書き洩しましたが大正六年七月十日附を以て本誌は第三種郵便物たる認可を得て居ます。)

秋になつてオルケストラ創立者の一人たる田中常彦氏は新婚後神奈川へ居を構へられたため合奏に加はる事が自然困難と成り遂にオルケストラを退く事と成つたの

で第一マンドリンのリーダーには室原氏が當る事となりました。そして新に山本巖、梅津勝夫二氏及曩きに慶應マンドリン倶楽部員として第五回演奏會に加はつた平井保之介氏を新にメンバーに迎へ入れました。

斯くして又秋の演奏會は來ました。第六回です。時日は十一月二十二日、會場も同じです。曲目は次の通りでマンドリン獨奏者としては室原氏がスタートジに立ちました。

一、a、即興諧謔曲

グラツイアーニ・ワルテル

b、無言詩

ブラッコ

二、五部合奏、a、即興幻想曲

シヨパン

b、音樂的構想の二瞬間

シユーベルト

三、マンドリン獨奏「岸邊に立ちて」

ボツタツキアーリ

四、歌劇「魔笛」序樂

モツアルト

五、組曲、寶玉の舞曲

ムニエル

a、鬼女のミヌエツト

b、エレース・カヴオツト

c、ジীগ

d、緩徐なるワルツ

e、燕のマヅルカ

六、ギター獨奏、a、バルコニーの下に

ヴリーランド

b、夢想曲

ヘイドン

七、ダンテとベアトリーチエ(冥想曲)

グラツイアーニ・ワルテル

八、四部合奏、a、ローマの印象

フランチャ

b、センピオーネ隧道の穿貫

ド・ジヨヴンニ

九、序樂、ルストスビール

ケラ・ベラ

演奏者は第一マンドリン、室原、田中(伸)、武井(弟)、山本四氏。第二マンドリン、小西、林田、平井、梅津四氏。マンドラ、市川、渡邊兩氏。マンドロンチエロ、菅原氏。ギター、高橋、横須賀兩氏。ハープギター、武井氏。ピアノ、坂東氏で四部合奏には室原、小西、渡邊、高橋四氏、五部合奏には如上の四人の中に菅原氏がマンドロンチエリストとして加はりました。

マンドリンオーケストラへの獨創的の曲として「ダンテとベアトリーチエ」、「寶玉の舞曲」、「即興諧謔曲」、「無言詩」の四つがプログラムにのつたのです。(此即興諧謔曲が大正十二年のコンコルソの課題曲になりました。)

斯うして大正七年も暮れて行きました。

大正八年に入つて雑誌は表紙畫を菅原明朗氏の手に成つたものと變へました。又室原隆興は或事情で當分マンドリンをもつ事が出来なくなりました。之はオーケストラに取つて可成り大きい打撃でありましたが其内に又菅原氏が急に奈良に行く

事に成つて一層困難な状態に成りました。然し同氏は奈良でクイの「オリエンタル」をアレンジしました。同氏は曩きにシベリウスの「悲しきワルツ」、デビユツシイの「牧神の午後の前奏曲」をマンドリンオーケストラに移し又ブラツコの「マンドリンの群」をレギュラーオーケストラに編むなど其非凡の精力には感嘆禁じ得ませんでした。

二月中旬から三月中旬迄オーケストラは臨時合奏を休みました。そして渡邊氏は上智大學を、梅津氏は高商を芽出度卒業されたのです。四月號の雑誌には大沼哲氏が原稿を寄せられました。此頃からオーケストラと大沼氏との關係は漸次密接になつて來ました。

新しいメンバーとして遅塚世六、村上三郎、鈴木誠の三氏が入られマンドラ、ギター、第二マンドリンへそれぞれ加はりました。四月上旬に英國のポーン氏から武井氏が譲り受けた二つの歴史的名ギターが到着しました。申す迄もなく其一つは

巨匠ラコートの作で、今一つは大ギタリスト、カルツリが所持したものであります。が此カルツリ號の方を昨秋の震災で失つたのは遺憾に堪えません。

六月號の雑誌から表紙畫を又變更し今度は大ギタリスト、ソルの肖像を掲げました。そして第七回演奏會は五月三十一日、六月一日の二日間保險協會のステージに開きました。二日制度を取つたのは來聽の希望者が非常に多くて一日では到底収容しきれなくなつたからであります。

一、夢みつゝ

ムニエル

二、諾威の踊

グリーンヒ

三、四部合奏

ミスエツト

ベートーフェン

四、最低音獨唱

歌劇「ラ・トラヴィアータ」中の抒情調

ヴェルディ

五、船人の組曲

アマデイ

六、「詩」

メルカダンテ

七、ギター齊奏

小夜樂

サルコリ

八、愛の夢

リスト

九、マンドリン獨奏

(イ) ニュールンベルグの追想

カラーチエ

(ロ) 矮人の踊

カラーチエ

十、歌劇「リゴレット」抜萃曲

ヴェルディ

メンバーの林田氏がマンドリンオーケストラ伴奏の下に獨唱を試みました。田中常彦氏(結婚されて澤氏を名乗られる様に成りましたが私達は不相變田中氏と呼んで居ました)はマンドリン獨奏にのみ出場され、武井氏はかねての希望を實現して

暫くギター獨奏に出る事を止め、高橋、渡邊兩氏がギターを齊奏しました。此第七回は今迄に比して第一マンドリンバートの非常に不足した演奏会で私達のオルケストラとしては不振時でありました。四部合奏は田中(伸)、武井(弟)、渡邊、高橋の四氏に據りましたが曲目は決して上乘と申せません。然しあれ程一般的に成つたアマデイの「船人の組曲」も實に此演奏會での演奏が口火を切つたものでありました。

コンサートの間に田代彦二氏が入られたので編成は第一マンドリンが田中(伸)、武井(弟)、山本巖、平井四氏、第二が小西、林田、梅津、鈴木四氏、マンドラが渡邊、遅塚、田代三氏、リウートが市川氏、ギターが村上氏、ハーブギターが高橋氏、ピアノが坂東氏でありました。

之より曩き武井氏はギター獨奏を蓄音機のレコードに吹込んで思つたより好成績をあげたので次にオルケストラをも吹込む事に成り六月十五日東京蓄音器會社で

「船人の組曲」や「諾威の踊」などを吹込みましたが不成功でした。

此六月林田氏を中心として一つの聲樂團體が生まれました。オルフォイス・ソサエタイと名付けられ、私達のオルケストラと密接の關係をもつたものです。

七月から八月へかけてオルケストラは合奏を休み九月から再び合奏を開きました。新に柯丁丑、福岡陽道二氏がメンバーに加はりました。十月五日オルケストラはオルフォイスと合同して玉川へ清遊會を催し、十一月十一、十二日の兩夜、第八回演奏會は開かれました。

一、歌劇「オラツイオ兄弟とクリアツイオ兄弟」序樂 チマローザ

二、四部合奏

(イ) アンデスの花

ド・ジョヴァニ

(ロ) レイモンド

マネツタイ

三、アンダンテ・レリジオーゾ

トーム

四、男聲合唱

- (イ) オールド・フォックス・アット・ホーム フオスター
(ロ) マッサス・イン・デ・コールド・コールド・グラウンド フオスター

五、バレエモの生活

グラツイアーニ・ワルラル

六、アングァンテ・カンタービレ

チャイコウスキー

七、オリエンタル

クイ

八、最低音獨唱

モツァルト

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」中の詠嘆調

九、マンドリン獨奏

ムニエル

愛の唄

グノー

十、歌劇「ファウスト」抜萃曲

第二マンドリンは小西、林田、福岡、柯の四氏、マンドラは遅塚、鈴木、田代、の三氏、ギターは渡邊、村上兩氏で其他は前回と變りがありませんでした。又室原氏が獨奏だけに出る事が出来たのは未だしも幸でありました。四部合奏は武井(弟)、小西、田中(伸)、渡邊の四氏で田中伸氏がマンドラを奏したのは其後にマンドラ奏者として立つ第一歩とも云はれませう。オルフォイス・ソサエタイは此演奏會後も尙提携して共にステージに立つ豫定でしたが此會が初めの終りとなつた事は誠に残念であります。林田氏の獨唱には「マルタ」のポーターの歌を加へる事に成つて居ましたが咽喉を害したために遂に之は割愛されたわけでした。クイの「オリエンタル」にはタムボリンと日本の太鼓とを加へました。

此頃から「ギター」の夕」を開かうと云ふ計畫は立てられましたが此年の中に實現はせずには年ばかりしました。

大正九年に入つて雑誌の表紙書は「友の前に彈奏する近代の大ギタリスト、タル

レガ」とし恰も此年がオルケストラ創立以來五年目に成るので「シンフォニア五年の回想」と云ふ記事をのせました。

菅原氏は前年の十一月末に上京したので再び合奏に加はる事に成りました。雑誌の編輯は大正七年十一月に此誌が從來の六號組から五號組に成つた時、高橋文雄氏に委ねられたのですが、此年に小西誠一氏に変更しました。

二月十七日午後五時から築地精養軒に創立五週年紀念の祝賀會を開いたのですが此祝賀會に於て從來の單なる集團組織は今日發展しつつあるオルケストラとして不備であると云ふ説が出て、茲に稍規律ある組織を作る事に成り、改めて武井氏を會長に、瀬戸口氏を指揮者に推舉し、且會員互選を以て田中、小西、高橋三氏を理事に、會長の指名により雑誌編輯者に引續き小西氏が留任する事に成りました。此組織變更は大正十二年震災迄引續いたのであります。

三月渡邊氏は突然三井物産會社から臺北勤務を命せられ、東京を出發しました。

オルケストラは送別茶話會を開き袂別を惜しみました。尙林田氏はオルフォイスの事務と學務の關係上暫くオルケストラを退く事に成りました。そして理事會は此二氏を新規定による名譽會員に推舉したのです。

三月三十日希臘の若き天才マンドリニスト、デメトリウス・シー・ドゥニスは弟アソニーの名を以て武井氏に書状を送り越し、日本來遊の希望を洩らし、尙其演奏會が經濟的に成功し得るや否やの問合せをして來ましたので、武井氏からは經濟的成功は覺束ないが是非來遊され度いと云ふ返事を送りました。結局之は實現しませんでした。ドゥニスが本オルケストラの存在を知つたのは米國の「クレッシェンド」誌の記事によつたのであります。

第九回演奏會は五月二十九、三十兩夜開かれました。

一、夜に

バルローニ

二、間奏曲

ヂエラール

三、ギター獨奏

(イ) ガロツプ

ソル

(ロ) 野遊び

武井守成作

四、三部合奏

セレナード調にて

カムブリア

五、アンダンテとポロネイズ

メツツアカーボ

六、序樂「メリアの平原に立ちて」

マネンテ

七、マンドリン獨奏

短二調のロマンツア

ブレース

八、匈牙利舞曲第五第六

ブラームス

九、四部合奏

秋の夕暮

マネンテ

十、西班牙の女

カンナ

第一マンドリンは室原、田中、武井(弟)、平井四氏、第二は小西、福岡、柯、西澤四氏、マンドラは市川清、遅塚、鈴木(兄)、鈴木(弟)四氏、リウートは菅原氏、マンドロンチエロは横須賀氏、ギターは村上氏、ハーブギターは高橋氏、ダルシトーンとピアノが坂東氏で、獨奏はマンドリンが室原氏、ギターが高橋氏、三部はマンドリンが室原氏、マンドラが横須賀氏、マンドロンチエロが菅原氏、四部は平井、福岡、遅塚、村上四氏でありました。申後れましたが西澤武夫、鈴木進(弟)の二氏は此演奏會の前から準會員として加はつたのであります。又室原氏が久振で合奏に加はり得る様に成りました。

此演奏會の當時伊太利の飛行家がローマ東京間の飛行を成功しましたので、私達は之を祝ふ爲に番外に「飛行家」と題するアルバンの行進曲を演奏しました。

聊か歧路に入りますが此年の五月號の月報に斯う云ふ記事が出て居ます。「菅原氏

ババとなり、オルケストラに子持三人、曰く武井氏、曰く田中氏、曰く菅原氏。と傍人云ふ。横より抗議を申込んで乃公を如何と云ふ人あり、願れば瀬戸口氏なり、曩きの人濟まして曰く、樂長の如き子福者はオルケストラの標準以外なりと。思へば田中氏は目下三兒を有す、來年あたりよりそろそろ標準以外の部に加はるの仁か」而も五年を経過した今日にして思へば實に感慨深いものであります。田中氏は無慮數人、武井氏は二人、菅原氏は三人、小笠原氏は二人、其他平井、松崎(渡邊)武井(弟)、高橋氏等皆ババとなつて居りますし、又當時は居なかつた人ですが木村、赤城、大沼等の諸氏も立派な父親でありまして、當時の獨身オルケストラは今では殆んど妻帯子持オルケストラに代つてしまつて居ります。時は誠に早いものであるとつくづく考へます。

七月の雜誌から又表紙をアグワドの肖像に変更しました。伊太利から第二回に積出されたキタローネが又しても行衛不明と云ふ不思議な葬られ方をしてしまひまし

たが、先きに注文したアイリツシ・ハープが六月八日について新にオルケストラパートを増しました。しかし此アイリツシ・ハープこそは全く豫期以上に下らないものであります。が新に英國からスタウフェル作のレニアニ型テルツギターが八月につきましたのはうれしい事でした。

此頃から武井氏や菅原氏の作曲熱が又盛んになり七月末に武井氏がオルケストラ曲「母」をものし菅原氏はラヴェルの小品をギターにアレンジしました。

第十回演奏會は十一月二十五、二十六日に開きました。

一、歌劇「コジ・ファン・トゥツテ」序樂

モツアルト

二、ギター二部合奏曲

第一の歩み

ソル

三、マンドリン獨奏

東洋の夢

ドウニス

四、母

武井守成作

五、組曲「村祭」

カンナ

六、(イ)天使の祈

ペクツチ

(ロ)白熱

ペクツチ

七、ハ調の四部合奏曲

ムニエル

八、ギター獨奏

バルドの唄

フェレール

九、望まれし日

ブランツオリ

第一マンドリンに木村圭三氏が入り、マンドラの鈴木(兄)氏はリウートへ、菅原氏はマンドロンチエロへ、ギターに横山朝善氏が入り、尙アイリツシ・ハーブは菅原氏、アルモニウムは柯氏が兼ね、横須賀氏が退いた外前回と同じメンバーでした。

又ギター二部は高橋、村上兩氏、四部は室原、小西、田中、菅原氏で此四部曲は單に初演と云ふ以外にムニエルのオリジナルな編成、即ちマンドロンチエロを加へる純粹なプレクトラム四部で発表した事が本邦では嚆矢でありました。

「村祭」にグロックensexピールと呼子鳥の笛、「望まれし日」にタイムパーニとアルモニウム、「母」にアイリツシ・ハーブを加へると云ふ譯で編成が多岐に亘つたのみならず、曲目の内容が此頃から更に一層充實した事を示しました。

ギター獨奏は久振で武井氏マンドリンは室原氏で、市川氏は入管、木村氏は病氣で出場し得なかつたのは遺憾でありました。ギター二部はカルツリの作品五十三番の二部曲を演奏する筈でありました。が都合上上記の曲とかへました。

大正十年に入りまして雑誌は十五錢から二十錢に値上げをしました。紙代と印刷費が高くなるので止むを得なかつたのです。そして表紙はムニエルの肖像にかはりました。菅原氏は前年十一月から再び奈良に移住し、どうとう今日迄奈良を動きま

せん。

三月下旬二三年前から懸案に成つて居た「ギターの夕」を開催しましたが之は不成功に終わりました。曲目は近代の作家のもののみでありましたが兎に角之はマンマと失敗に歸しました。

第十一回演奏會は六月六、七兩日開催、第一マンダリンの田中氏がマンドラに廻り、江川幸一氏が新に入り、第二マンダリンに吉井俊二氏が加はり、マンドラに田中が廻つた外近藤武幹氏、ギターに清保氏、ピアノの坂東氏は渡歐した爲大沼氏がそれぞれ加はりました。ギター獨奏は武井氏、マンダリンは室原氏です。

一、ホタ(西班牙舞曲の第五)

グラナドス

二、四部合奏

(イ) 山吹く風

モルラツキ

(ロ) ホ調のポレロ

アマデイ

三、ギター獨奏

カブリチオ・アラブ

タルレガ

四、第一變奏狂想曲

アリエンツォ

五、序樂「ローラ」

ラヴィトラーノ

六、マンドラ獨奏

(イ) 黄昏

武井守成作

(ロ) 悲しき思ひ

ベルレンギ

七、マンダリン獨奏

第二前奏曲

カラーチエ

八、(イ) 幻影

メツツアカーボ

(ロ) 小品

メツツアカーボ

豫て二見文學士によつて計畫されて居た私達のオルケストラの小田原行が實現し

て六月十八日同地に赴き小田原女學校の講堂で演奏會を開き、メッツァアカーボの「幻影」小品、アリエンツォの「第一變奏狂想曲」、グラナドスの「ホタ」、ヴェルディの「リゴレット」抜萃曲をオルケストラで、モルラツキの「山吹く風」を四部で、プロカの「西班牙の思出」をギター獨奏で、武井氏作の「黄昏」をマンドラ獨奏で、ドゥニスの「東洋の夢」をマンドリン獨奏で曲目を作りました。そしてギター獨奏は村上氏、マンドラは田中伸氏、マンドリンは室原氏によつたのです。此演奏會を終へて一同は箱根底倉の葛屋旅館に一泊し、翌十九日小田原で二見文學士父子の饗應をうけて歸朝しました。小田原は歴史的に音樂の理解の深い所で、又著名な音樂家音樂評論家を出して居る所でもありますから此旅行はオルケストラの最初の企てとして誠によい試練となりました。大沼氏は此旅行の印象を箱根みやげの玩具笛四個を加へてオルケストラ用のスケルツォに作りしました。

オルケストラに於て教授機關設置の企てはかねて立てられて居りましたが此頃其一端を實現してマンドリンを室原氏、ギターを村上氏にそれぞれ教授者として公認いたしました。又カラチエの演奏レコードが初めて日本に入つたのも此頃の事でもあります。

雑誌は八月號からジュリアーニの肖像を表紙畫としましたが十一月號だけは次に記すムニエル祭の爲にムニエル號として再び彼の肖像をのせました。

愈々多年の計畫でありましたムニエル祭を第十二回演奏會に於て實行する事に成り十一月五、六兩日左のプログラムによつて開催いたしました。本年は恰も彼死して十年目に當りますので最も適當な時機である事を思ひましたのです。

一、伊太利風子守唄

二、マンドリン二部合奏

(イ) 嫉妬深き愛人の小夜樂(グレットリー原作)

(ロ) ボロネーズ(ベトーフエン原作)

三、四部合奏(二長調)

四、船唄

五、ムニエルに捧ぐる曲

武井菅原合作

六、寶玉の舞曲

七、三部合奏(イ長調)

八、マンドリン獨奏

移り氣

九、夢みつゝ

番外、ダンテとベアトリーチエ

グラツィアーニ・ワルテル

獨奏は室原氏、二部は木村、江川兩氏、四部は室原、小西、田中、鈴木四氏、三部は平井、遅塚、村上三氏による事になりましたが此三部は或事情で割愛いたすの止むなきに到りました。

第一マンドリンには歸朝して再び入つた小笠原氏、第二マンドリンには福岡氏が抜けて外島鴻兒、安倍寛之の兩新メンバー、ギターに再び歸京した渡邊氏がそれぞれ加はつた外、リウイトとマンドロンチエロとが菅原、鈴木兩氏で交替した外前回に同じであります。番外として「ダンテとベアトリーチエ」を加へたのは詩聖の六百年祭が今年伊太利で催されましたのを機として特に附加へたものです。

武井、菅原兩氏合作の「ムニエルに捧ぐる曲」は九月二十四日に完成したもので、此他に菅原氏は曩にデビュツシーの「第二アラベスタ」をマンドリンのみの四部にアレンジし、又レギュラーオーケストラにマンドラ八個を結合した「ホーム」をかき、デビュツシーの「小組曲」をマンドリンオーケストラ用にアレンジしました。

ムニエル祭に掲げる爲に彼の肖像を書いた鈴木誠氏は「三人の裸婦」と云ふ作品が芽出度帝展をパスしたのも面白い事です。

小笠原、渡邊兩氏の歸朝を迎へ、室原、福岡兩氏の入營を送る爲會長の主催で十一月二十四日、四谷の三河屋に送迎會を開きました。世の中は誠にうまくしたもので二人宛の交替は大勢に大影響を與へずに済みました。

此秋ビックフォード夫妻のレコードが初めて本邦に入りました。カラーチエのマンドリンやマンドラ、リウート等が本邦に入つたのも此年が初めて非常な勢で賣れて行きました。小笠原氏と木村氏は其中最も優れた二つのマンドリンを手に入れて悲喜交々到つた顔をしました。いゝ樂器を手にするのは嬉しいが値段が高いので。

大正十一年の劈頭、長い間まちにまつたキタローネが三度目の正直でどうどう着きました、同時にアルチキタルラも來ました。本邦に於て之が最初の最低音部完成であります。雑誌はカルツリの肖像を表紙に出し面目を新にし、大沼氏は昨年箱根の印象の曲の外三つの小品を書いて一つの組曲を完成しました。二月初旬に武井

氏のギター獨奏曲「タルレガに捧ぐる曲」、「野遊び」、マンドラ獨奏曲「黄昏」の三つが出版されました。邦人の作曲（之等の樂器に對する）で出版せられた嚆矢であります。

村上氏は美術學校の卒業製作として「ギターをもてる武井氏」を書き、第二番の成績で業を卒へました。

第十三回演奏會は前回のムニエル祭が全然ムニエルの作品のみを演奏すると云ふ一つの制限を加へられた後として非常に緊張した練習を行つて會に臨みました。殊にキタローネ、アルチキタルラの二つの新樂器が加はつた事は内外に刺戟を與へたのです。

一、(イ)五月の夜

モンテイ

(ロ)ソルレントの女

ア・コツタン

二、マンドリン獨奏

第十前奏曲

三、第二變奏狂想曲

カラーチエ

四、テルツギター、ギター二部合奏

アリエンツオ

(イ) 三つのランドラー

ジュリアーニ

(ロ) 圓舞曲

メットカーフ作武井編

五、月光と戀愛

マツサ

六、ワルツ調にて

菅原明朗作

七、天使の夢

ルビンスタイン

八、五部合奏

小組曲

ポツタツキアール

九、ギター獨奏

(イ) アルレグロ

メルツ

(ロ) ロシタ

タルレガ

(ハ) タルレガに捧ぐる曲

武井守成作

十、ポローニア市への挨拶

フランツオリ

第一マンドリンは小笠原、江川、平井、木村、吉井、外島六氏、第二は小西、柯、西澤、安倍、平井(武雄)、赤城(泰舒)六氏、マンドラは田中、渡邊、鈴木(弟)、近藤四氏、リウートは遅塚氏、マンドロンチエロは菅原、鈴木(兄)二氏、ギターは村上、清、武井(守善)三氏、ハーブギターは高橋氏、アルチキタルラは菅原氏が兼ね、キタローネは青山氏、ピアノとダルシトーンは大沼氏であります。此内小笠原氏は喪がかかつて出られず、武井守城氏は神戸へ赴任の爲に退き、渡邊氏は久し振にマンドラパートに復歸した外、新に平井(武)、赤城、武井(守善)の三氏が加はつたわけです。獨奏者は江川(マンドリン)、村上(ギター)の兩氏、二部は村上、高橋二氏、五部は江川、木村、小西、外島、田中の五氏によりました。

永年の計畫であつた合奏團競演會が愈々進捗して七月號の雜誌には具體案を發表しました。

昨年小田原に旅行しましたのが病つきとなつて今年は堂々と箱根の宮の下、富士屋ホテルに宿泊して此處で演奏會を開く事に成り、七月二十二日午後九時から、宿泊中の外人、箱根滞在中の主な人々を招待し、オルケストラで「ポローニア市への挨拶」「第二變奏狂想曲」、「夜に」、「ソルレントの女」、それにメッツアカーポの「アンドンテとポローネーズ」ムニエルの「寶玉の舞曲」中のワルス、ベクツチのホルカ「白熱」アルパンの行進曲「飛行家」を、ギター獨奏でメルツの「アルレグロ」にタルレガの「ロシタ」、マンドリン獨奏でムニエルの「船唄」等を演奏いたしました。

此旅行は正式に富士屋ホテルの滞在客となつたわけで、一つには洋式エテイクツトを習練し、天晴紳士にしやうと云ふ會長の計畫でありました。又此七月には武井氏が英國のポーン氏から絶版の珍らしい樂譜を澤山譲り受けたので其整理に可成多忙でありました。

第十四回演奏會は十一月二十四日夜生命保險協會の新らしいホールで開かれました。

一、序樂詩

ラウダス

二、ギター獨奏

(イ) 獨言

フエレール

(ロ) ミヌエツト

タルレガ

三、ハ長調四部合奏曲

大沼哲作

四、第一タランテルラ

ラ・スカラ

五、「西班牙」組曲

フアルボ

六、マンドリン獨奏

第一司伴樂

カラーチエ

七、「センサツイオーニ」圓舞曲

ペクツチ

獨奏者は前回通り。四部は小笠原、平井、渡邊、遅塚四氏、オルケストラは柯氏が朝鮮に赴き、安倍氏が退き、其代りに小泉素彦氏が新に加はりましただけの相違がありました。そして大沼氏の四部曲發表は大なる意義を斯界に齎しました。又今迄二日制を取つて居たのを急に一日制にして見たために御來聽の方々に對して誠に御迷惑を御かけしたのは相濟まぬ事でありました。江川氏がカラーチエの第一司伴樂を奏する事に成つて居ましたが左手の小指に關節リウマチスを病んで結局第三樂章を割愛したのは甚だ残念でありました。

小西氏が來春渡歐する事に成り、爲に理事の補缺選舉を行ひまして平井保之介氏が當選しました。

明くれば大正十二年であります。此年の劈頭一月二十一日に第一回全國マンドリン合奏團コンコルソが開かれました。之は本邦斯界史に再び新らしき紀元を劃する

出來事でした。役員や參加團體名は別稿で御覽を願ひますが、結局京都の同志社大學が榮冠をうけたのであります。そして雜誌も一月號は特に「コンコルソ號」といいたしました。

此第一回コンコルソは最初の企劃としては實際大成功であつたと思ひますし、又私達のオルケストラは全員が全く必死の努力をなしたものであります。

第十五回演奏會は六月十七日、帝國ホテルに開きました。そして此演奏會にカラーチエの作つたアルチリウートが新に加はりました。

一、交響的前奏曲

ポツタツキアーリ

二、マンドリン獨奏

「幻影」

江川幸一作

三、アダジオ

ペトーフエン

四、第三ガヴァオッタ

マルチエルリ

五、希臘風主題によれる序樂

ラウダス

六、マンドロンチエロ、ギター二部合奏

「絃の物語」

ピックフォード

七、マンドリン獨奏

「第一前奏曲」

カラーチエ

八、哀情

ベクツチ

獨奏は江川氏が自作を、室原氏が「前奏曲」をひき二部は鈴木(兄)、村上兩氏、オルケストラは第一マンドリンが室原、小笠原、福岡、木村、西澤、吉井六氏、第二が平井、武井(城)、平井(武)、赤城、小泉、島貫六氏、マンドラが田中、松崎、鈴木(弟)、近藤、兼藤五氏、リウートが渥塚氏、マンドロンチエロが菅原、鈴木二氏、ギターが清、武井(善)、八代三氏、ハーブギターが村上氏、キタローネが高橋氏、アルチリウートが江川氏、ダルシトーンとピアノが大沼氏でありました。此内、島

貫、八代の二氏は新らしい會員でありました。

之より曩き武井氏は英國のボーン氏との間に契約が纏まり、ボーン文庫一切を譲受けまして之を武井文庫に併合しました。之によつて今迄でさへ世界に有数の藏書數をもつて居た武井文庫は世界獨歩の大文庫に成りましたのです。しかしそれも皆今では夢です。一切は灰と成りました。

瀬戸口氏は此演奏會を名残りとしてステージを退かれ新に大沼氏が選ばれました。

書き残しましたが雑誌表紙書は本年初頭から「若かりし時のカラーチエ」に代へました。そして八月號を發行し、九月號の印刷に着手し、オルケストラは八月に入つて合奏を休み、秋の第十六回演奏會の爲に九月から猛烈な練習を開始しやうと思ひました。

時も時、九月一日、彼の震火災はオルケストラの本部たる武井氏邸を襲ひ、あら

ゆる楽器、あらゆる楽譜を一切灰燼として仕舞ひました。

楽器は唯一つラコート號ギターをもち出したのと逗子の別荘にあつた二つのギターが残つたきりです。

涙もかれました。憤つても、なげいても結局詮ない事です。武井氏邸の焼跡には無数のレコードが赤くなつて散つて居り、ノートの讀み得る楽譜が山と積まれて灰となつて居りました。メンバーは焼跡に去りもやらず呆然と佇みました。

然し、やがて一同は我に歸りました。そして猛然として復興に従事したのです。

武井氏は楽譜、楽器の注文を即刻出しました。十一月には帝國ホテルに總會を開き、此災害を機として内部組織を變更し、メンバーの或人々には退會を願ひ、名も多数決によつて「オルケストラ・シンフォニカ・タケキ」と改めました。

斯くて復興は思ひの外はかぎり中音部迄の楽器は年内に集まりました。

大正十三年に入りまして着々と復興の業に成りました。そして昨年十一月から少

數で行つて居た合奏を二月六日の水曜から正式合奏に入りました。同時にオルケス

トラ内に於て毎月研究会を開き各人が互に研究し合ふ企を實行しました。

雑誌は三月から復活し、名を「マンドリンギター研究」と改めて毎月刊行いたして居ります事は御承知の通りです。第十六回の演奏會は春に開催出來たのですが自重して楽器全部の揃ふのを待ちました。四月三十日にかねて注文のキタローネ、アルチキタルラ、マンドローネが到着しました。キタローネやアルチキタルラは震災前のそれと比較に成らぬ程優れたものであり、マンドローネもよいものが手に入りました。

五月本オルケストラ設立者の一人である澤常彦氏が歸朝されました。私達は十二日に歓迎會を上野精養軒に開いたのです。

六月中旬には佛國ヂエラのマンドロンチエロが又到着しました外、キタローネが數個三田の竹内に着きましたので此内一個を買入れました。此キタローネは前にも

つて居たモンツイーノ製に近いものであまり結構な品ではありませんが然し之によつて東京の主な合奏團は此樂器を入手し得たのであります。そして最後にマンドラコントラルトが八月につきました。

六月二十八日、一泊旅行を飯能へ試みました。之は震災に受けた打撃を忘れ、復興に全力を注いだ勞苦を慰さめ、且全會員の一致精神を向上せんとする企てでありました。

而も此間オルケストラは震災前よりも大きい計畫を立てて居りました。

第一に十月二十八日に第十六回演奏會、十一月三十日に第二回競演會を開きます外、本邦に初めての作曲コンコルツを企まして豫想以上の成績をあげ、又多年の懸案でありました單行本を御覽の通り發行し、又大沼氏のオルケストラ曲、菅原氏の三部曲、武井氏のギター曲を出版いたしました。

此他近い中にギター教則本は極めて新らしい編纂裡に公にされます上、マンドリン教則本も亦出版される豫定に成つて居ります。

現在會員は正會員が十九名、準會員が五名、名譽會員が七名であります。樂器はマンドリン二十、マンドラコントラルト一、マンドラテノレ四、リウート一、マンドロンチエロ二、マンドローネ二、ギター十、アルチキタルラー、キタローネ二を所有し、樂譜は古典的な絶版譜を除く外、殆んど全部震災前の復活を得ました。

私達としては復興が此時日に完成された事を寧ろ奇蹟的に考へて居ります。そして必死の努力が如何に大きい仕事をなすかをしみじみ考へさせられました。而も最復興の困難な文庫の復活が最近に實現し得る事に成りましたのは何より喜ばしい事であります。

今日以後オルケストラは一層の努力を行ふ心算で居ります。そしてあらゆる同好家と密接な連絡をとりつゝ本邦斯界の爲に一路行進を急がうと決心して居ります。

(終)

◎正 誤 表

頁	行	誤	正
三二	一	響穴下	響穴側
六七	一	バラライカセクレダ	バラライカセクンダ
七四	一二	アグワト	アグワド
九三	一二	發行されて居るらしい。	發行されて居る。
九八	二	然し	従つて
同	五	Valentin	Valentin
一〇六	七	ビアンキ・ムニエル	ビアンキ、ムニエル
一二〇	二	日光	月光
一二七	二	習はん	習ばん

一四五	九	オクターヴ	二オクターヴ
同	一一	同前	同前
一七八	一	メルツの如き。	メルツの如き、
一九一	八	積むのである、	積むのである。
一九六	七	〇調	ト調
二四一	一	注意	注意
同	一〇	彼れの	彼の
二五二	一〇	マンドロチエロ	マンドロンチエロ
二六八	一	最低音楽器	低音楽器
二七二	四	批判	批判
三五三	一一	バガニー	バガニーニ
三七二	三	ふくみ聲	ふくみ聲

同	一一	此兩問題	此構造及音性の兩問題
三八四	一二	其れどが獨立して	其れど獨立して
三八五	八	ハバニネラ	ハバニエラ
三九六	二	私聲上	和聲上
三九九	一	感じの曲	感じの曲
同	一	タクニツクの曲	タクニツクの曲
四〇〇	五	曲の研究はせひとも	曲の研究は是非とも
同	一〇	進行の美なるは	進行の美などは

◎挿 脱 表

七四 一二 「アグワド」の次に「Dionisio Aguado」を加ふ。
 八六 五 「千九百九年」の次に「千九百十一年？」を加ふ。

- 一一五 一〇 「殊に」の次に「ロツコは」を加ふ。
- 一二七 五 「最初の」を削る。
- 一五五 三 「今日では」の次に「多く」を加ふ。
- 一五八 三 括弧内「胴體に近いフレット」の次に「若しくは胴體に迄延
長せる指板上のフレット」を加ふ。
- 二二七 九 「マンドローネ」の次に「キタローネ」を加ふ。
- 三七四 一二 「右の三種は」より行を改める。

大正十三年十一月二十五日印刷
大正十三年十一月二十八日發行

版權所有



定價 金四圓五拾錢
送料 金拾貳錢

著者 東京市本郷區湯島三組町五十九番地
オルケストラ・シンフォニカ・タケキ
代表者 武井守成
印刷者 東京市芝區南佐久間町一丁目三番地
鎌田政太郎
印刷所 東京市芝區南佐久間町一丁目三番地
明文社

發行所

東京市本郷區湯島三組町五十九番地
オルケストラ・シンフォニカ・タケキ
電話淺草六二九九・七五九九
東京市京橋區竹川町十四番地

發賣元

日本樂器製造株式會社東京支店
(共益商社)
電話銀座一一二〇(代)
振替口座東京二一〇七〇